

巻頭言

会長退任の挨拶

— 2 年間を終えて —



廣瀬通孝

東京大学

2 年間というのは長いように見えて、あっという間だったというのが正直な印象です。何とか伊福部新会長にバトンをお渡しできそうな状況であり、とりあえずひと安心といったところでしょうか。会長就任時の挨拶には 5 代目将軍は綱吉だと書きました。在任中、「生類憐みの令」のような悪政はしなかったと本人は思っていますが、もしも意識しないで何かやったら、更にたちが悪いことになります。その場合は本当にごめんなさいとあらかじめ謝っておきます。

会長在任中、最も印象に残ったことと言えば、今年の東日本大震災です。少なからざる会員の方々が被災されました。約 1 年間経過しましたが、状況はいかがでしょうか。改めてお見舞い申し上げます。学会全体の話題としても、余震の中での総会の開催、学会としてのメッセージの発信、様々な学術団体の発する調査への対応など、会員の皆様には色々な局面でご協力いただきました。改めて御礼申し上げます。

震災直後から、榎並副会長に声をあげていただき、震災特別委員会を立ち上げ、VR 技術が何をなし得るかについて議論を始めました。今年の全国大会での OS の構成、学会誌での特集、などなど、広汎な議論を繰り広げることが出来ました。この初動の早さについては、学会として誇ってよいことだと思っています。もちろん、この議論は 1 年間という短い時間で総括できるようなものではありません。折に触れて我々の頭の中で反芻していく必要があるわけで、新会長の思いも同じと思っています。

この震災は、先端技術に関わる人々に色々なことを考

えさせるきっかけを与えてくれました。我々人類に降りかかる様々な災厄に対して、いわゆる先端科学技術研究があまり有効なソリューションを与えていないのではないかと、という問いかけは、阪神大震災、9.11、などの大事件のごと繰返しなされてきました。それが今回の大震災において、決定的なものになったと言えるでしょう。

科学技術の基本的な方法論は、仮説 → 実験 → 仮説修正というループにあるとされています。そのループが何よりも強力な方法論であることを我々科学技術者たちは確信しています。しかしながら近年、このループは社会を巻き込むほど大きなものに成長することが要求されています。つまり、単純な実験室実験では十分な答えを出すことができなくなっているのです。技術が先端化、先鋭化する一方で、その有効性を検証するループの構成が難しくなっているのは皮肉なことです。

本来、社会における様々な問題は具体的であり、個別的なものです。それに対し、科学技術の知見は汎用的、一般的なもので、それを簡単に社会に応用できるほど単純ではなくなっているのかも知れません。10 年以上前のことですが、数学者の広中平祐先生が、「これまでの単純な仮説検証にもとづく、いわゆる「端正」科学の時代は終わったのではないかと。これからは複雑系の時代である。」という話をされたことがあります。今更ながら名言と思います。我々はまさに新しい実験室を必要としているのです。

幸い、VR という領域の研究者たちは、「バーチャル」を扱うがゆえに「リアル」を強力に意識するという習性を身につけています。「ライフログ」のような現実世界

の種々雑多な大量のデータを取り扱う技術、「複合現実感」のような現実世界とVR世界を融合してあつかう技術をはじめとして、現実世界と深く関わる研究領域を数多く抱えてもいます。

大会の特別講演にお招きした震災復興会議の御厨貴先生は、「この震災を未来の世代に臨場感をもって伝えていくために、VRのような技術の果たす役割は大きい」とおっしゃいました。ともすれば、シリアスな話題から最も遠い領域のように見られがちなVRですが、かなり強力な特効薬が我々の領域の中に含まれているのではないのでしょうか。

さて、柄にもなくまじめなことを書きすぎたかもしれません。少し話題を変えましょう。先の挨拶で綱吉は元禄時代を生み出したとも書いた記憶があります。震災のせいもあって、この方向については十分な仕事ができなかったと思います。ただ、恒産恒心（恒産ナケレバ恒心ナシ）という故事成語があります。それなりの物的豊かさがなければ、心の豊かさもまた生じない。極端な清貧の思想はナンセンスだという意味です。これは、ある種のゆとりが重要だというものであり、こういう時代だからこそ、心の豊かさを考えていくことが必要なのではないのでしょうか。VR学会では「文化フォーラム」の流れがそれにあたるでしょう。

先日、任期のほぼ最後になりますが、江戸東京博物館のご好意で久々の文化フォーラムを開催することができました。これは鉄道博物館で開催したフォーラムに続く新しいシリーズで、河口先生流の自然の中のサイバイバル系とはやや性格を異にする文化部サークル系の流れです。新会長はゴジラの権威ですから、この流れを補強してさらに発展いただけるものと信じていま

す。文化芸術と科学技術の新しい関係を探ることは原島会長以来の大きな潮流であり、わが学会の存在意義の一つと考えております。

もう一つ重要なことを忘れていました。フェロー制度の導入です。これは、前々から理事会を中心に議論されてきたもので、学会としては、これまでの学会運営にご協力いただいた功績への感謝に加え、これからも引き続き学会を支えていただくことを期待しています。したがって、フェローの先生方には、これまで以上に学会から無理難題が持ち込まれることになるかも知れません。油断なさらぬようお願い致します。

最後に事務局の運営に関しては、長年事務局を支えていただいた田中あづささんの退任をはじめとして、メンバーの大幅な入れ替わりがありました。そんな中、新しいメンバーを率いて、事務局のパフォーマンスを維持するばかりでなく、お気楽な会長を支えてくれた、リーダー格の柳沼潔野さんには本当に感謝したいと思います。この原稿の遅延が最後のご迷惑であると切に願います。

さて、我国はこれから、世界中のどの国も経験したことのない本格的な高齢社会に突入していくことになります。2055年には65才以上のいわゆる高齢者が人口の40%を占めることになると言われていています。こうした社会的な地殻変動にVRという先端技術はどのようなソリューションを与えることができるのでしょうか。この問いかけは、先に申し上げた社会と技術との新しい関係を要求しているものと思います。震災で考えざるを得なかった色々なことはここに生かされるべきでしょう。

この時期に、当該分野の権威である伊福部先生に会長をバトンタッチできることは、まさに歴史的なめぐり合わせを感じています。ぜひ、よろしく願いいたします。

【略歴】

廣瀬通孝 (HIROSE Michitaka)

東京大学大学院情報理工学系研究科 教授

1954年鎌倉生まれ。1977年東京大学工学部産業機械工学科卒、1982年東京大学大学院博士課程修了、工学博士。同大学工学専任講師、1983年同助教授、1999年東京大学先端科学技術研究センター教授を経て、2006年東京大学大学院情報理工学系研究科教授。専門は、システム工学、ヒューマン・インタフェース、バーチャル・リアリティ。通信・放送機構MVL/SVRプロジェクト プロジェクトリーダー、産業技術総合研究所特別顧問、情報通信研究機構 プログラムコーディネータなどを務める。情報化月間推進会議議長表彰、東京テクノフォーラム・ゴールドメダル賞、大川出版賞などを受賞。主な著書に「バーチャル・リアリティ」産業図書(1993)、「電脳都市の誕生」PHP研究所(1996)、「空間型コンピュータ」岩波書店(2002)、「ヒトと機械のあいだ」岩波書店(2007)など。